

## 「鳴らないトランペット」<sup>な</sup>

——このたび、Sの慰靈<sup>いれい</sup>コンサートを開催する運びとなりました。生前、Sに<sup>かか</sup>関わりのあった方々にお声がけさせていただいています。もしよろしければ、来てやってはいただけないでしょうか——

親友の弟Sくんが亡くなってから、もう三年がたつ。自ら命を絶つという、不幸な最期だった。

男三兄弟の末っ子で、真面目<sup>まじめ</sup>で明るい子だったのを覚えている。だからこそ、不幸を知らせる連絡をもらったとき、あまりの衝撃で言葉を失<sup>な</sup>くした。

ぼくの弟とSくんも同じ年で、同じ中学に通っていた。

彼らが高校に進学するとき、ぼくの弟はSくんに、一緒の高校に行こうと誘ったらしい。当時の学力で、SくんはE高に合格できるかどうか微妙

なラインだったのだという。それでも、見事に合格した。ぼくの弟の何気ない誘いに大きく支えられてのことだったと、Sくんは生前語っていたそうだ。

そんなこともあって、親友一家とは家族ぐるみで交流してきた。

ぼくの弟が挫折ざせつしたとき、親友は弟を旅に連れていって励ましてくれたこともあった。だから余計に、ぼくは無力感むりきんに苛さいまれることがある。自分は、親友の弟Sくんに何もしてあげられなかった。いや、もしも生前、何かをしてあげられる機会を与えられていたところで、自分などにいったい何ができただろう。一人で自身と戦って、もがき苦しんだであろう彼に対して。

Sくんは、遺書を残して忽然こつぜんと消えた。連絡が途絶え不審に思った家族が彼のアパートに行ったとき、部屋の中はごみ屋敷のような散らかりようだったらしい。

発見されたのは、失踪しっそうから二か月たってからのことだ。

最悪の事態を覚悟していたという親友は、やつとSくんが発見された、と電話口で努めて明るく言った。

「なんだか、まだSが生きてる気がするよ」

掛けられる言葉など、見つからなかった。

「なあ、死後の世界って、どこかに存在すると思う？」

どう応じれば正解だったか。いまでも答えは見つかっていない。

以来、作家を生業なりわいとしていた自分は、死というテーマを扱うとき、ずっしりと重みを感じるようになった。人は簡単には死なない。でも、ときにあっけなく死んでしまう。

自分のしている、書くという行為の意味とは何か。この理不尽な現実に対して、自分のできる悪あがきとは何か――。

そんなことを考えているうちに、三年もの月日が流れていた。

「久しぶり」

ぼくは人で溢れかえったロビーで親友の姿を見つけて声を掛けた。

「おおっ」

いまやバリバリの商社マンの親友は、持ち前の潑刺とした雰囲気はつらつで、こんな場でも明るくさせてしまう力がある。

「元氣してた？」

「うん、なんとかね。それにしても、すごい人だなあ……」

同じような境遇の方々との合同コンサートなのだろうか、と周囲を見渡しぼくは思った。

「ご無沙汰ぶさたしています」

振り向くと、親友のお母さんの姿があった。

ぼくは軽く会釈をする。

お母さんは、ありがとうございます、と頭を下げた。

「お忙しいのに来ていただいて……突然のお手紙を許してください」

いいえ、全然、このたびは……。

「こういったコンサートは、よく開かれてるんで

すか?」

「いいえ、これがはじめてです。同時に、最後の会でもあって……不思議な指揮者を紹介してもらったんです」

「指揮者?」

「ええ、ですから、今日がSの最後の演奏になるんですよ」

「Sくんの……?」

ぼくは素直に疑問を抱いた。

「演奏って……今日はSくんを偲しのぶ会じゃないんですか?」

慰霊コンサートというのは、故人の魂を鎮しずめたり、遺族などの残された者の心を癒いしたりするために行われるのが通常だ。今日はみんなで音楽を聞きながら、Sくんのことを追悼ついでうする日じゃないのだろうか……。

ふと、ぼくは思いだした。Sくんは、ずっと吹奏楽をしていたことを。

彼は優れたトランペット奏者だった。中学時代には全国大会にも出場していて、E高でも吹奏楽

部に入っていた。

そのことが、お母さんの言葉と何か関係があるのだろうかと、ぼくは思った。

「まあ、理屈はいったん抜きにして、とりあえず中に中に」

事情を知っているらしい親友に促され、ぼくたちはホールに足を踏み入れた。

座席について、ステージのほうに目をやった。幕はすでに開いていて、楽器たちがずらりと台座に据えられていた。

「あれは……」

よくあるコンサートの場合なら、楽器はだいたいい入場のときに奏者が手にして入ってくる。

「右から三番目がSのトランペットなんです」

隣に座ったお母さんが口を開いた。

「ステージにあるのは全部、今日ここに来ている遺族の人たちに残された遺品です。うちの場合は、トランペット。あれからずっと、どうしてもケースを開けられずにそのまま倉庫にしまっておいたものです」

お母さんはステージの上の楽器に視線をやる。

「ケースの蓋ふたを開けてしまうと、耐えられなくなるのは分かっていますから……。

あのトランペットは、Sが中三のときに買ったものなんですよ。全国大会に出場することが決まって、楽器屋の社長さんをお願いして一か月かけて良いものを探してもらったんです。Sは社長さんが用意してくれたヴィンセント・バックの三本ひとすじなわから、一番吹きづらいものを選びました。たぶん、一筋縄ではいかない楽器を、思うように仕立ててやろうと考えたんだと思います。長らくSはトランペットと格闘していたようですが、何とかそれなりに扱えるようになったようです。

本人はとても嫌がりましたけど、わたしは夫と一緒に何度も演奏を聴きに行きました。トランペットを吹いているときに、一番生き生きとしていた時間だったように思います。でも、もうその姿を見ることはできません。楽器を置き去りにして、奏者のほうが先にあちらに行ってしまったんですからね。

あの輝いていたころのSを思いだすのが辛くつて、わたしたちは残されたトランペットに手をつけることができませんでした……あの指揮者に出会うまでは」

ステージ上では、楽器たちがそれぞれ光を放っている。

トロンボーン、ホルン、チューバ。

クラリネット、コントラバス、パーカッション。

そしてぴかぴかに磨かれたトランペットは、見事な金色だ。

「その、指揮者というのは……」

「特別なタクトを振る人なんです」

お母さんは語った。

「元々は神事に関わることをされていた人らしくって。そのタクト——指揮棒も、古来、日本の神事で作られてきた榊さかきでつくられた特別なものなんです。榊のタクトは、この世に残る心のエネルギーに働きかける作用を持っているそうです。指揮者は楽器に残った奏者の思いに働きかけて、もう一度、音を奏かなでさせてあげる。そうすることで、



不幸な魂を癒すことができるんです」

「それじゃあ、今夜、演奏するのは……」

「Sを含めた、楽器に残った故人の魂たちなんですよ」

ぼくは堪<sup>たま</sup>らず親友のほうに目をやって、助けを求めた。

「分かる、分かる」

親友は笑った。

「おれも親から聞いたときは、いかにも怪しいとしか思わなかったから」

でも、と、真顔でつづけた。

「別の人の慰霊コンサートに招待されて、実際の演奏に触れてびっくりしたよ。誰も人がいないのに、勝手に楽器が宙に浮かんで音を奏ではじめるんだからなあ。最初こそ手品みたいに何かで操ってるのかと思ったけど、目には映らない透明な人が、楽器を手にして演奏してるようにしか見えななんだ。ホールは啜<sup>すす</sup>り泣く声で満たされてた。あとで聞いたら、どの楽器が奏でる音も故人の演奏そのものだったらしくって」

だから、Sのトランペットもお願いすることに決めたのだと言ひ添えた。

ぼくが何も言えないでいると、親友は時計を見て、ステージを向いた。

「さあ、そろそろ開演だ」

アナウンスが響き、ホールは静寂せいじやくに包まれる。

ぼくは座席に座り直して、そのときを待った。

ゆったりとした足取りで、舞台袖そでから人影が現れた。燕尾服えんびふくを着た白髪の老人——指揮者だ。

老人は指揮台に登ると、並んだ楽器たちを見渡した。

枝葉の茂ったものを俊敏しゅんびんに構える。

榊のタクト——。

肩がぴくりとしたかと思つた次の瞬間。

タクトがちよんちよんと動きだした。煽あおるように、何かを誘いだすように。

踊りはじめる、という表現がふさわしいだろうか。最初に反応したのは、ホルンだった。台座の上で糸に引かれるようにして自然と弾みだしたのだ。

それを契機に、一斉に楽器たちが踊りだした。このときを待ちわび、抑えこまれていたものが爆ぜるがごとく、一気にステージ上の籬たがが外れた。

タクトが撓しなる。指揮者が大きく躍動する。

ステージに、ついに奏者が現れた。

楽器が台座から持ちあげられるようにふわりと宙に浮かびあがると、ホールに音が鳴りはじめる。

オーボエ、クラリネット、フルート。

トロンボーン、チューバ、トランペット。

演奏はところどころ噛かみ合っておらず、素人耳にも決してうまいとは言えなかった。即興楽団の一夜限りの公演なのだ。それでも、そんなことは関係なかった。単なる音の連なりを超えた力強いうねりが、ぐっと胸に迫ってくる。

楽器は楽しげに踊りつづける。

奏者は影も形も一切ない。にもかかわらず、そのシルエットが見えるようだ。

ハーモニーが生みだされ、音の波が広がっていく。

フォルテからフォルティッシモへ。かと思った

らすぐに弱まり、ピアノニツシモへ。

指揮者はときに繊細せんさいに、ときにダイナミックに、全身全霊で汗を飛ばす。

トランペットのソロに差し掛かるころ、ぼくはSくんの存在をはっきり感じとっていた。自分は一度も、彼の演奏を見たことがない。だがいま、最初で最後の公演で初めて彼の生きざまを目にしているのだ。

楽器は空気を震わせつづけ、クライマックスへと駆けあがる。

花火のような華やかな音が派手に咲く。

バン、バン、バン、とフィナーレが飾られると、指揮者の両手が力強くぴたりと止まった。

一瞬のあいだ、ホールは真空さながらの静けさが支配した。

次の瞬間、轟とどろくような拍手と声援が場を占めた。指揮者はこちらを振り向いて、陽気に一礼をしてみせた。スタンディングオベーション。

喝采かっさいの中、指揮者が指揮台をゆっくり降りる。

楽器は大事に戻されるように、台座にふわりと据

えられた。

指揮者が退場してもなお、拍手は鳴りやむことはなかった。

楽器はもはや、ぴくりとも動かない。

が、演奏し終わった奏者たちの疲労と興奮の混じった荒い息は聞こえてくる。

理屈で語れる域ではなかった。

この日の演奏を、ぼくは生涯、忘れないだろう。

演奏会から数週間がたってから、親友のお母さんからお礼の手紙をいただいた。

その中に、SくんのトランペットはE高吹奏楽部のOB会に寄贈したと書かれてあった。

——あの演奏会に参加して、ようやく決心がつかれました。鳴らないトランペットを持っていても、ちっとも幸せじゃないんです。どこかでまた誰かが吹いてくれることを、心の底から祈っています

その後、数年がたった同窓会の立ち話でのこと。吹奏楽部出身の友人から、偶然こんな話を聞かされた。

OB会の所有しているトランペットに名器と呼ぶにふさわしい代物しろものがあるという。ただし、並大抵の技量では音を出すことすらままならない。まるでトランペットが抵抗するように、吹いても吹いても音が出ないのだと彼は言った。

しかし、一度ものにしてしまえば、極上の音を奏でてくれる。不思議なことに、ときには楽器のほうほうが奏者をリードしてくることもあるらしい。

まあ、それは本当か分からない、都市伝説みたいなものだけど、と彼は笑った。

ぼくは友人に合わせて笑いながら、もしかすると、それはあのSくんのトランペットではないかと思った。

あれだけの演奏を終えてさえも、トランペットにはSくんのエネルギーが残っていた。そして手

に取る者に、そう簡単にいつてたまるかという意地を見せているのではないだろうか。

そんなことを漠然ぼくぜんと考えていると、そうそう、と、友人は付け加えた。

そう言えば、そのトランペットは、ときどき誰も触れてないのに音を出すらしいんだ。

ぷっぷっぷっ、って。

友人は冗談めかして口にする。

「それがなんでも、笑ってるみたいに聞こえるらしくてさ」